



Title	古ノルド語文法書における格の扱い
Author(s)	堀井, 祐介
Citation	大阪大学言語文化学. 1993, 2, p. 107-116
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78181
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古ノルド語文法書における格の扱い*

堀井 祐介**

The aim of this paper is to make a classification of case in Old Norse by examining Old Norse grammars. This extends the analysis presented in my master thesis, "The Features of Gods and Heroes in the Use of Verbs in Eddic Poetry"(1992), in which some grammatical features of nouns were examined in connection with verbs. Morphological case classification made it difficult to fully investigate the functioning of nouns. Therefore a more comprehensive, syntactical classification needs to be made.

For this purpose, some standard grammars are selected and compared with each other. The explanations in Hanssen et al. (1975) and Iversen(1984) are itemized and insufficient for my purpose; Nygaard(1865-1867) treats only examples from Eddic Poetry; Lund(1862) employs some old-fashioned terms. Nygaard(1966 edition) contains clear explanation and classification. By drawing on the above grammars, a comprehensive presentation of case can be made.

From this, a detailed analysis can be included in an extended database which can be used to examine features of Gods and Heroes in Eddic Poetry.

1 研究目的

先に提出した修士論文「『エッダ詩集』における動詞から見た神々と英雄の特徴」(1992)において、古ノルド語韻文作品である「エッダ詩集」の動詞に焦点を当てて神々と英雄の特徴を調べた。その分析過程において動詞と関わる語について

*Case in Old Norse Grammars (Yusuke HORII)

**言語文化研究科博士後期課程

て、文法的項目として人称、数、格の分類を行った。しかしながら、それらの中で特に格に関しては形態上の差異に注目したため、一部の語についてはその形態上の分類だけでは動詞の目的語かどうかを明確に判断出来ない例も出てきた。修士論文で扱ったテーマを今後発展させていくにあたり、より詳しい格の定義、分類の必要を感じたため、本稿では古ノルド語文法書における格の扱いを整理し、出来るだけ単純な形にまとめてみたい。

2 分析方法

古ノルド語統語論、文法を扱った主要な文法書5冊¹⁾を取り上げた。そして、それぞれにおいて格がどの様に定義、分類されているのかを調べ、比較検討してみる。

3 格の分類

対象とした5冊を調べた結果、Hanssen 他(1975)はハンドブック的に各項目が簡潔にまとめられているが、用法の説明が十分でない。Iversen(1984)はさらに簡潔に箇条書きでまとめてあり、説明もより一層短く不十分である。Nygaard(1865-1867)は「エッダ詩集」だけを対象としているために、そこに出てこない用法については説明がなされていない。Lund(1862)では、用いられている用語が古く、用法の説明も回りくどく難解である。Nygaard(1966)は項目がよく整理されており説明も十分につけられているが、一部属格における分類の仕方が他の4冊と異なるなどの点が見られた。以上のように5冊それぞれに不十分な点があるため、用

¹Hanssen, Eskil; Mundal, Else; Skadberg, Kaare: *Norrøn grammatikk*. Universitetsforlaget, Oslo, 1975.

Iversen, Ragnvald: *Norrøn grammatikk*. 7. utgave revidert ved E. F. Halvorsen, Aschehoug, 1984.

Nygaard, M.: *Norrøn Syntax*. Aschehoug, Oslo, 1906, reprinted 1966.

Nygaard, M.: *Eddasprogets Syntax I-II*. Bergen. 1865-1867.

Lund, G. F. V.: *Oldnordisk Ordføjningslære*. Det Nordiske Literatursamfund. København, 1862.

これらの他に Nygaard, M.: *Bemerkninger, Rettelser og Supplementer til Min Norrøn Syntax*. Kristiania, 1917. があるがこれは *Norrøn Syntax*(1906) への注釈・訂正・補遺であり、文法的説明は無いので本稿では調査の対象にはしなかった。

法の分類や説明をそれらの文法書の間でお互いに補足しながら、出来るだけ分かりやすく以下のようにまとめた。

古ノルド語においては4つの格（主格、対格、与格、属格）がある。

3.1 主格

主格には文法的主語、主語に対する補語、呼びかけ（ゲルマン語ではゴート語に残されている呼格）の3つの用法がある。

3.2 対格

対格には文法的目的語、目的語の補語、主格主語の無い構文における意味上の主語、副詞的対格の4つの用法があり、それぞれ以下のように下位分類される。

3.2.1 文法的目的語

1. 外的目的語

動詞の表す行為が直接対象に影響を与える、または直接対象に向けられている場合その対象を目的語として対格で表す。受動態になるとき、対格目的語は主語になる。

2. 内的目的語

動詞の表す行為が影響を及ぼす行為の外にある対象ではなく、行為自身にすでに内包される概念を表す目的語。動詞と同じ語根を持つ、または意味の上で動詞に近い名詞がこれに含まれる。sofa svefn（眠りを眠る）、sverja eið（誓いを誓う）。内的目的語も受動態において主語となりうる。内的、外的両目的語をとる場合もある（受動態にすると外的目的語が主語になる）。konungr hjó hann banahogg（王は彼に死の一撃を与えた）。

3. 結果の目的語

動詞の行為が生み出すものまたは結果を表す目的語。vega sigrinn（勝利を勝ち取る）。結果の目的語も受動態において主語となりうる。

4. 自動詞と結びつく目的語

心の状態、その発現を表す本来は自動詞である動詞につく。現代ノルウェー

語などでは前置詞を伴って表される。bæði vinir ok úvinir grétu dauða hans (味方も敵も一緒に彼の死に対して泣いた)。

3.2.2 目的語の補語

動詞の対格目的語の補語は同じく対格で表す。“誰か(何か)を～と呼ぶ、～と名付ける、～とする、～とみなす、～らしい” kalla, nefna, gera, setja, telja, ætla, sýna sik など。

3.2.3 主格主語の無い文における意味上の主語

主格主語の無い文においては、動詞で表される行為に関わる人が行為者ではなく、動詞の概念を受ける対象であるので対格で表される。心理的、肉体的感覚を表す表現において、動詞は3人称単数形で、人を対格で表す。mik minnir (私は思い出す)、mik þyrstir (私は喉が乾いた)。一部の動詞はものを表す内的目的語もとる。mik dreymir stóra drauma (私は大きな夢を見る)。“欠けている、不足している”を表す動詞において、動詞は3人称単数形で、人と欠けているものを対格で表す。mik skortir eigi hug (私に勇気が無いわけではない)。“起こる” henda、“値する” kosta も同様。skal oss aldregi þá skömm henda (あのような不名誉なことは私たちには決して起こらない)。

3.2.4 副詞的用法

時(ある時点、時の広がり)、場所、道(移動を表す動詞とともに)、方向(‘道’)を表す名詞とともに)、方法、広がり、距離、重さ、価格を表す。nóttina alla (夜の間中)、fara landveg (陸路に行く)、gullhring vá hálfra mörk (黄金の腕輪は半マルクの重さがある) など。

3.3 与格

与格は四つの格(与格、具格、奪格、所格)の機能を含んでいる。それぞれの機能を表す与格は以下のように下位分類される。

3.3.1 本来の与格

間接目的語として、利害関係のある人（もの）を表す（利害の与格）。直接目的語は対格、属格、具格的与格で表される。“与える” *gefa*, *unna*, “非難する” *bregða* など。

その他に本来の与格をとる動詞：

- a) “喜ばせる、好む、不機嫌にする、嫌う” *hugna*, *líka*, *mislíka*, *misþknast* など。
- b) “～の為になる、役立つ” *gagna*, *stoða*, *duga* など。
- c) “救う、助ける、守る、親切にする、楽しむ、賞賛する、信じる” *bjarga*, *fulltingja*, *hjálpa*, *miskunna*, *skemta*, *hecla*, *trúa* など。
- d) “傷つける、虐待する、破壊する、危険にさらす、怒る、脅す、呪う、非難する” *bana*, *angra*, *eyða*, *hætta*, *reiðast*, *hecla*, *þolva* など。
- e) “支配する、操る、引き起こす、従う、仕える” *stjórna*, *stýra*, *afla*, *þjóna* など。
- f) “まとめる、整理する、並べる” *haga*, *háttu*, *skipa* など。
- g) “近くにいる、来る” *fylgja*, *mceta*, *ná* など。
- h) “延期する、止める、終わらせる” *fresta*, *létta*, *lúka* など。
- i) “保つ” *halda* や“似ている” *líkjast*、“慣れている” *venjast*、“拒否する” *níta* など。
- j) “等しい、一緒に起こる” 人やものを表すために、*jafn-*, *sam-* をとる複合動詞は与格をとる。*jafnbjóða*（匹敵する）、*samfagna*（一緒に喜ぶ）など。一部の *sam-* 複合動詞は目的語を対格、間接目的語を与格にとる。*samtengja*（結びつける）など。

本来の与格と結びつく形容詞：

- a) “役立つ、親しい、心地よい”、それらの反意語。*nytsamligr*, *kærr*, *þekkr*, *úþarfr* など。
- b) 友好的または敵対的な心理。*blíðr*, *góðr*, *illr*, *ámunr* など。
- c) “近い、遠い” *náinn*, *fjarlæggr* など。
- d) 親族関係、姻族関係 *skyldr*, *sifjaðr* など。
- e) 類似。*líkr*, *úlíkr* など。
- f) 従順、忠実。*hlýðinn*, *úhlýðinn* など。
- g) “慣れている、共有している、同じ特徴を持つ” *vanr*, *samr* など。

h) and-, jafn-, sam- との複合形容詞。andstreymr (対立する)、jafnborinn (生まれにおいて同じ)、sambærilegr (ふさわしい) など。

vera + 与格で所有者を表す。gúll er þér nú (黄金は今やあなたのものだ)。

vera + 現在分詞 (起こるべき、起こりうる) とその他の受動表現で与格は論理的主語となる。yðr er þat vel geranda, ráðer þér ráðit (これはあなたによってなされるべきである、あなたによって助言が与えられる)。

3.3.2 具格的与格

1. 道具、手段を表す (～によって)

a) “刀で切る、目で見える” hoggva sverði, sjá augum など。

b) “備えている、飾られている” などを表す過去分詞とともに búin dýrligum klæðum, hann var gyrðir sverði (高価な布でおおわれている、刀を持っている)。

2. 移動を示す動詞とともに用いられる与格

本来は具格的にそれを用いて移動が行われるものを示していたが、後に移動の影響を受けるものも表すようになった。róa skipum (船を使って漕ぐ→船を漕ぐ)、skjóta spjótum (槍を使って狙う→槍を投げる) など。

3. 価格、価値を表す

“買う、売る、支払う、評価する、罰金を払う” など。hann keypti landit litlu verði, veðja hofði (彼はその土地を安く買った、首を賭ける)。

4. 同行、同伴を示す (～とともに)

特に skip, lið, herr (船、軍隊)。þeir fóru fjórum skipum suðr, konungr ætlaði at sigla liði því til Íslands (彼らは四隻の船とともに南へ向かった、王はその軍隊とともにアイスランドへ航海するつもりだった)。

5. 原因

“喜び、悲しみ、満足、落胆、恐れ、怒り、誇り” などを表す動詞や形容詞とともに。hann fagnar því, hrósaði Loki veiði sinni (彼はそれを喜ぶ、ロキは自分の獲物を自慢した)。

6. 方法

ganga berum fótum (裸足で歩く)。

7. 差

形容詞の比較級、最上級と結びついて差の程度を表す。fám dögum síðar kom Björn, fjórum vetrum ellri (ビョルンは数日遅れてやって来た、4歳年上) など。また比較の意味を持つ前置詞 fyrir, eptir とともに結びつく。hann andaðist einum vetri eptir fall Óláfs konungs (彼はオーラフ王の死の一年後に死んだ)。

3.3.3 奪格的与格

1. “～から”を表す

“離す、遠ざける、奪う” firra, ráða, rænaなどを意味する動詞において人は対格、ものを与格にとる。“～に関して”を表す。sýnum, blindr báðum augum (外見について、両方の目が見えない)。

2. 比較(特に詩に多い)

比較構文において比較されるもの(「～よりも」にあたる)が与格で表される。比較の対象を示す en は用いない。以下のような場合に用いられる。

a) 比較級で用いられる形容詞の表す特徴が、比較されるものに典型的な場合 hunangi scetari, sólu fegra (蜂蜜より甘い、太陽より輝いている)。

b) 一般的な否定文において hef ek engan gram þér œðra hitt (あなたより素晴らしい王はいない)。

c) 全体との比較において(最上級またはそれに近い程度、誰と、何と比べても) hann var hverjum manni sterkari (彼は誰よりも強かった)。

d) 比較されるものが動詞的意味を持つ名詞の場合 fara menn at sofa vánu bráðara (期待していたよりも早く眠りにつく)。

e) ある決まった大きさとの比較において tuttugu vetr eða tuttugu vetrum lengr (20年またはそれ以上)。

f) 比較される2者があるグループまたは対立する項を形成しているとき ánauðgan mann hygg ek opt vera frjálsum fróðara (しばしば私は、束縛されている人の方が自由な人よりも賢いと思う)。

3.3.4 所格的与格

ある行為の行われる場所、空間を示す。散文においては vegr と結びついたりつかの表現に見られるのみである。gllummegum, gðrummegum (あらゆるとこ

ろで、別の面で)など。詩においてもまれに見られる。sat kvisti ein (枝に座っている)。

時を表す。主に stund, sinn と結びついて。þá bauð þorsteinn honum þar at vera þeim stundum sem hann vildi (ソールステインは彼が望むときに彼にそこにいてくれるよう頼んだ)。詩においては何かが起こった時を示す。át vætr Freyja átta nóttum (フレイヤは8晩何も食べていない)。

3.3.5 絶対的与格

名詞と分詞の与格形で、副詞節のように用いられる。at upprennandi sólu, henni lifandi (日の出に、彼女が生きている間に)。

3.4 属格

3.4.1 名詞との結びつき

1. 所有・関係の属格

所有、親族関係、友好・敵対関係、支配・従属関係、起源、原因、必然的な(概念上の)つながり、認められた取り決め・周囲の状況から引き起こされる関係。þræll konungs, ætt ok afkvæmi Gjúka, úvinr hans, einvaldi alls Noregs, flesk galtar (王の奴隷、ギューキの一族と子孫、彼の敵、ノルウェーの独裁者、牡豚の肉)など。

2. 限定の属格

名詞に同格的につけられてより詳しく個別化する。Askr Yggdrasils (ユツグドラシルのトネリコ)など。

3. 記述の属格

名詞に特徴、性質を与える。

a)特に háttir, kyn, ætt, hǫnd などの属格。alls háttar íþrótt, mikilsháttar maðr, hvers kyns er hann? (あらゆる種類の知識、有能な男、彼はどんな種類の人ですか?)。

b)数詞＋属格で時、空間、大きさの広がりを表す。tveggja daga vist, sjau fóta rum (20日間の滞在、7歩の広さの部屋(墓))。

c)その他複合名詞の特徴、性質、状態、地位などを表す第一要素。kappsmaðr, rausnarmaðr, leyndarvinr, pellsklæð(勇敢な男、寛大な男、秘密の友、絹

の服)。

4. 全体と部分の関係を表す属格

a)構成要素の属格。全体または集合を表す名詞に対して、それらを構成している要素を表す。ætt jotna (巨人の一族)。量を表す語に対して、その量の性質を表すためにつけられる場合もある。gjalda 60 marka gulls (60 マルクの金の賠償)。

b)全体の属格。その一部分がとられてきた全体を示すために部分を表す語につけられる。部分を示す名詞や、数詞、最上級(比較級)の形容詞、指示・疑問・不定代名詞につけられる。hinn neyti hlutr trésins, þann tíma várs, einn þeira hét Sæmingr (木の一番下の部分、春のその時期、彼らの一人はサミングと呼ばれた)。

c)強調の属格。mær meyja (女性の中の女性)。

3.4.2 動詞的名詞との結びつき

1. 主語的属格

動詞的名詞を動詞に変えたとき、属格で表されている名詞が主語になる。
fall Ólafs konungs (オーラフ王の死)。

2. 目的語的属格

動詞的名詞を動詞に変えたとき、属格で表されている名詞が目的語になる。
Íslands bygð (アイスランドの建国)。

3.4.3 動詞との結びつき

対格目的語より緩い結びつきで、本来属格の全体と部分の関係を表す機能からきている。従って、属格は動詞の扱う対象が属格で表されている名詞全体ではなく、その一部分であることを示している。

a)“願望、希望、期待” vilnast, vána, vætta など。

b)“獲得する、試す、利益を得る、欠けている、必要である” afla, freista, njóta, missa, þurfa など。

c)“注意を払う、議論する、思い出す、訪れる” gá, geyma, minnast, vitja など。

d)“頼む、要求する、強要する、～しないように助言する” biðja, krefja, eggja, letja など。人を表す目的語は対格。

e)“与える、拒む” ljá, synja など。人を表す目的語は与格。

- f) “償う、復讐する、後悔する、恥じる” *galda, hefna, iðrast, skammast* など。
 g) “非難する” *firna, vá* など。
 h) “評価する” *virða* を表す動詞の場合 *mikils, lítils, engis* などの属格が程度を表すのに用いられる。

3.4.4 形容詞との結びつき

“希望がある・希望がない、～したい・したくない” *vænn, ørvænn, fúss, úfúss* など。“一杯、満足している、欠けている、自由である” *fullr, saðr, andvanr, lauss* など。“知っている、気づいている” *víss, varr* など。“～の原因” *valdi, valdr* など。“義務がある、約束する” *skyldr, játsi* など。“確信している、義務がある・無い” *sekr, úsannr* など。

より緩やかな結びつきとして、その形容詞が何に関して述べられているのかを示す用法がある。*góðr viðmælis, harðr viðreignar* (上手な会話、激しい戦闘)。

広がりを表す形容詞(*hár, djúpr, langr, breiðr, síðr, þykkur, víðr*)に対して、その大きさが属格で表される。*fimm fóta lǫng* ‘5 歩分の長さ’。同様に年齢を表す *gamall* にも属格が用いられる。その場合、*gamall* はしばしば省略される。*tólf vetra (gamall)* (12 歳)。

“値する” *verðr*。*þótti Svíakonungi lítils vert um her Óláfs konungs* (スウェーデンの王はオーラフ王の軍隊を低く評価している)。

3.4.5 副詞的用法

時(～以内に、～の間に)、場所、様態(非常にまれ)を表す。*þriggja náttu* (3 晩以内に)、*miðra garða* (広場の真ん中で) など。

4 おわりに

5 冊の古ノルド語文法書を調べた結果として、古ノルド語における格の扱いの概略を以上のようにまとめた。今後はこれをもとに修士論文で作成したデータベースを改訂し、動詞とそれに関わる各語との文法的関係をより詳しく、よりはっきりと把握し、動詞からみた神々と英雄の特徴を探るための有効な手段の一つとして活用したいと思う。